

“変”なのは、この本の方だ！ 幕内秀夫「変な給食」の詭弁。

いま、学校給食はがんばっている。

一食あたりの食材費は、240円。

でも栄養士さんや調理員さんたちは、その限られた予算の中で栄養に気を配りながら、子どもたちがおいしく食べられるよう毎日のメニューを工夫する。

アレルギーの子がいれば、個別の対応もする。このごろは食材の放射線測定も欠かせない。

できるだけ地域の食材を使い、手作りの「給食だよ」で食育の指導もする。

みな、子どもたちの「おいしかった」の声を励みに、がんばってくれている。だから、子どもたちも給食が大好きだ。

ところが最近、藤沢の学校給食を嘲笑するかなのような本が出版された。

その本とは、ブックマン社が発行した「変な給食」と続巻の「もっと変な給食」。その中で、藤沢の献立のいくつかが「変な給食」の例とされたのだ。

こうした話は俗耳に入りやすい。TBSの「朝ズバッ！」がこの本をとりあげた結果、市民の一部からは「藤沢の給食は大丈夫？」などという声まであがった。

では、この本の内容は事実なのだろうか？

「非行」の原因は学校給食!?

学校給食が子どもを病気にする！

成人病の低年齢化、むし歯、アレルギー、肥満、非行、学力低下、運動能力低下……すぐキれる！

「給食によって『非行』や『学力低下』が起きる」本の帯に書かれた文を見て、私は唖然とした。この本は、本当に読むに値するのだろうか？

著者は幕内秀夫氏だ。「フーズ&ヘルス研究所」を主宰し、「学校給食と子どもの健康を考える会」の代表をつとめる管理栄養士だという。

この本は、献立表をもとに給食を再現したという写真に、幕内氏の文章が添えられるという体裁だ。

続巻の「もっと変な給食」では、藤沢市の給食が最初に取り上げられている。



その“変な”給食の献立は、「ソフトめんきつねうどん」に「バイクドチーズケーキ」と「牛乳」。

幕内氏はこれに「立ち食いそば屋なら、おにぎりつけるのに…」と見出しをつけた上で、こう揶揄する。

「このソフトめんの日の貧弱さといったらどうでしょう。手抜きにしか見えません。(傍点は筆者)」

「組み合わせ」が“変”だと言うのかと思えば、彼はまったく別のところをあげつらいはじめる。

注意が必要なのは、これは実際に出された給食の写真ではない、ということだ。

幕内氏は、「献立表」などをもとに「極力忠実に再現した」（「もっと変な給食」P144）という。

だが、献立表には「きつねうどん」「バイクドチーズケーキ」とあるだけだ。使用する食材やその調理法などが、わかるはずがない。

この写真は、幕内氏が字面から「再現」したまうたく別のものにすぎない。それを「貧弱」「手抜きにしか見えない」というのでは、自作自演もはなはだしい。

栄養士さんたちが「実物がどんなものかを確認もせず、ケチをつけるなんて…」と困惑するのも当然だ。

「組み合わせ」や「栄養」の問題などを正面から議論するなら、まだわかる。だが、この本のどのページも、誇張された興味本位の記述の連続なのだ。

幕内氏の主張は「米飯給食」至上主義

幕内氏が“変”と主張する献立を見ていくと、ある傾向が浮かび上がる。

右の表を見てほしい。幕内氏が“変”だという全国の献立例の大半は、パンや麺を主食にしたものだ。一方、米飯給食は雑炊を除き一例もない。

幕内氏は「おかしな献立が現れるのは圧倒的にパンや菓子パンが主食のときです」という一方、「完全米飯給食を実施している自治体には、変な献立の給食はほとんどありません」（「変な給食」P60）と述べる。

それは本当だろうか。この判定が中立的な基準にもとづき「全献立における“変”な給食の出現率」をカウントした、というなら客観性もある。だが、私にはきわめて恣意的な選択に思えてならない。

なぜなら、幕内氏の主催する「学校給食と子どもの健康を考える会」について、「変な給食」はこう紹介しているからだ。「学校給食の完全米飯化を願い、さまざまな活動を行っています」

つまり、幕内氏はもともと米飯給食推進派なのだ。中立な第三者ではない。

幕内氏が「変な献立はほとんどない」と賞賛する自治体の献立表にも、「ごはん」と「ココアパウダー」「牛乳」という組み合わせがある。



これだって、人によっては「変な給食」と言うだろう。結局は、主観なのである。

幕内氏は、米飯給食推進という「結論ありき」の立場からパンや麺の献立を批判しているにすぎない。

「変な給食」には、「完全米飯給食で非行ゼロに」というコラムまで登場する。だが読んでみれば、「完全米飯給食」と「非行ゼロ」の因果関係を、とうてい立証するものではない。

生徒指導に悩む現場の先生たちは、何と言うだろう。

幕内氏と「ホメオパシー」

幕内秀夫氏とは、どんな人物なのだろう。

本の経歴欄には、東京農大栄養学科を卒業したのち「帯津三敬病院」で食事相談を担当する、とある。

この病院の名誉院長である帯津良一氏とは、共著で「なぜ『粗食』が体にいいのか」（東洋経済新報社）なども執筆しており、関係は親密だ。

さて、この「帯津三敬病院」である。

「ホメオパシー（※注）」をご存じだろうか。限り

なく希釈した物質を染みこませた砂糖玉（レメディ）を用いる、民間“療法”のひとつだ。

もちろん、治療効果はない。だが、ホメオパシーに「効果がある」と信じて現代医学を拒否した患者が死亡する事件まで起き、2010年に日本学術会議はホメオパシーについて異例の会長談話を発表する。

ホメオパシーの治療効果は科学的に明確に否定されています。それを「効果がある」と称して治療に使用することは厳に慎むべき行為です。

だが「治療に使用することは厳に慎むべき行為」にもかわらず、「帯津三敬病院」は今だにホメオパシーを医療の一部として取り入れている。

なぜなら、帯津良一氏自身がホメオパシー推進団体「日本ホメオパシー医学会」の理事長だからだ。幕内氏はその病院の「食事相談担当」だったのである。

では、「帯津三敬病院」で幕内氏が行っている「食事相談」とは、どんなものだろう。

幕内氏の「粗食のすすめ」（新潮文庫）には、様々な予防線は張っているとはいえ、「乳ガンの再発を食事で抑える」という見出し（同書P230）が躍る。

「砂糖玉で病気が治る」

「米飯給食で非行がなくなる」

「食事でガンの再発が抑えられる」

“変”なのは藤沢の給食だろうか。それとも、幕内氏や帯津氏だろうか。

（注）学校教育とホメオパシーについては、長崎大学教育学部の「疑似科学とのつきあいかた」<http://astro.edu.nagasaki-u.ac.jp/~masa/pseudoscience.html>に詳しい。

多くの市民が給食を応援

群馬大学の高橋久仁子教授は、食べ物が健康や病気に与える影響を過大に評価・過信することを「フードファディズム」と呼び、こう警告する。

「休養や運動の不足、不摂生な生活習慣のツケを帳消しにして、それさえ食べれば健康問題を解決してくれるというマジックフーズはなく、逆にそれを食べると病気になるという悪魔フーズもありません。」

幕内氏の主張は、まさにこの類だ。

私は米飯給食が広まることにけっして反対ではない。だが、その論議はもっと冷静な方法で行われるべきだ。「変な給食」は、真摯な論議にはほど遠い。

「朝ズバッ！」の放送の後、市役所には何件もの市民の声が寄せられた。だがその多くは、藤沢の給食を応援する声だったという。

藤沢の給食はがんばっている。